

<流離い>

「こら！おまえ何回目や」「ネ、ネ、もう一回！もう一回!!」「しょうがねえなあ、もう一回やど」。私の前には行列ができています。だっこや肩車をしてもらうために、幼い子が並んでいるのだ。倉敷から3日かけて辿り着いた、廿日市市「光の園摂理の家」。私の衣服は汗で濡れているのに、この子達は気にならないのだろうか。それほど愛情に飢えているのだ。

ここは、親の勝手な理由で捨てられたり、虐待を受けたりした子供達を庇護する施設である。この子達の親は「人」ではない。犬畜生にも劣る、生きる権利のない奴等だ。こんなにかわいい子供達をどうして捨てたり虐めたりできるのか。「さあ来い、何度でもいいぞ」と足を踏ん張った。

2度目の訪問の時、3回肩車をしてあげた女の子はズシリと重くなって恥かし気だったが、やっぱり一番に飛んで来た。涙がいくらあっても足りなかった。

「兄さん、遠くからよう来なすったなあ、疲れたやろ。まあ、ゆっくり休んでいきんさい。」と20人程のおじいさん、おばあさんが玄関に出て迎えてくれた。小野田カソリック老人ホーム、最初に徳山から走って行った時のことだった。ビックリして全員と握手をしている最中に、感極まって泣いてしまった。笑顔を送るどころか、逆に元気付けられたのだ。

いずれもスマイルランでの出来事だった。

「お客さん、お客さん、ご気分でも悪いのですか。」と車掌さんから呼び起された。11月3日6:21新宮発「ワイドビュー南紀2号」の車内である。うなされていたらしい。顔はベトトリ涙で濡れている。「光の園摂理の家」と「小野田カソリック老人ホーム」の夢を見ていたようだ。

そう言えば、昨夜「はまやす」からホテルに戻り、そのままベッドにボタンキュウして、朝慌てて飛び起き、一番列車に飛び乗ったんだったな。

ジャーニー中はしょっちゅう泣く。うれし泣き、悲し泣き、悔し泣き。情けと感動。そして、過去と現在。走っている時は、これらのことが次から次へと頭を過り、大声で喚いて涙を流す。誰に憚ることもなく、声は車の騒音で掻き消される。日常ではできないことがやれるジャーニーの世界。非日常世界に没頭する。

今日は、三重県桑名駅で電車を降り長良川に架かる伊勢大橋、木曾川に架かる尾張大橋を渡り、近鉄弥富駅から電車で名古屋に行き、そこから名電で笠寺まで行って名古屋を縦断して多治見に向かう予定だ。

日本一周を目指すのであれば、そのまま平塚(スマイルランで神奈川県平塚以西は繋がっている)まで電車で行って北上すべきなのだが、私はつらつらを巡っても日本一周とは思わ

ない。どういう定義があっただけなのか誰も決めていないし、決められるわけがない。レースでもないしね。それよっか、好きな所に行って走る。これだよ。すなわち、脚のむくま心まの欲すままだ。日本全国流離いの旅だ。流離う重戦車ってとこだ。

伊勢大橋、尾張大橋はスマイルランで一度渡っているが、夜で景色がよく見えなかったし、環境問題で取り上げられる中では横綱級の長良川河口堰をしっかりと見届けておきたい、と考えたのだ。その河口堰は伊勢大橋の下流 500m に建設されている。インバーダーの飛行物体の様な邪悪な形をした構造物が突き出ている。

各地を巡っていると、「どうしてこんな道、橋、トンネルが必要なのか」と思うこと度々だが、この河口堰は最右翼だろう。誌面での批判は限がないので控えておくが。

長さ 1km 程の二つの橋を気持ちよく渡り、近鉄吉富駅から電車に乗ったのは 11:00 過ぎだった。本来なら一つ前の駅で乗る予定だったのだが、その駅への入口標識を見逃したのだ。待ち時間やら何やらで 40 分のロスだ。痛恨のミスなり。

その後、名古屋から笠寺まで名鉄で行き、再スタートしたのは正午だった。初日でない限り、午後 40km 残すのはかなりしんどい。しかも、名古屋の市街地抜けだ。

名古屋はどこを通っても道も歩道も広い。人もさほど多くはなく走りやすいが、交差点が多くて道が広い分、信号待ち時間が長い。また、狭い路地と言えども車がガンガン飛び出てくるので、信号無視は自殺行為になる。

不思議なもので、信号は一旦かかってしまうとほぼ全部ひっかかってしまう。スピードがないものだから、点滅状態では突っ込めない。

県道 55 号を北上、瑞穂区、千種区、右手に名古屋ドームを見て矢田橋を渡り守山区に入る。この間ひっかかった信号は 17 箇所だった。景色が変わらないので数えたのだ。たったの 14~15km なのに時計は 14:00 を回っていた。信号待ちはバカにはならない。

と、ここでサプライズ。前方から来た人に歩道の左に寄れと指示された。私より年配の方で、「どこまでいきますか」と尋ねられた。「多治見まで」と答えると、「あと 20km ですね、もう少しですよ、頑張ってください。私はこの春、広島～東京まで知人をサポートして走ったのです。」と話された。

目が顔からとんくり出た。只の行き合いでこんな人と出会うなんて。お互い急いでいたので詳しい話しは出来なかったが、ジャーニー同志者がここにも「いる」ということに元気づけられた。何処かでまた会えるだろう。

あと 20km なら 17:00 までには着けるぞ、と意気込んだのはいいが、ここで道がさっぱり分からなくなった。2006 年発行の地図だから古いのだ。載っていない道路や交差点がいっぱいある。あっちにも多治見、こっちにも多治見という標識があった。

これはいかんと思い、行当たりのタンタン麺屋に寄って尋ねると、これがまた要領を得ない。「県道 15 号は JR 中央線沿いだ、中央線はローカル(?)線だから、あまり電車が走っていない。おまけに大変な山道だから、何かあった時に困る。国道 19 号を行った方がいいですよ。」とのことだった。

どちらで行っても地図の上では同じくらいだが、中央線はローカル線ではない。中津川までは 20 分おきに走っている。教えて頂いて申し訳ないが、このアドバイスには従わないこ

とにした。しかし、タンタン麺とビールは旨かったね。

その後、なんとか正常なルートに戻り、春日井市を遠巻きに眺めて高蔵寺という駅の近くにやって来た。多治見まで15km、時刻は15:30、微妙なところである。先ほどのタンタン麺屋のご主人の話では、ここからは険しい山道で、暗くなったらほとんど通りがなくて怖いそうだ。駅は2つあるが、谷底だったり山の上だったりということだった。

せっかく立ち寄っておいしいタンタン麺とビールをいただいたのだから、一つくらい忠告を聞かなくてはね。ほんなら「左向け左、目標高蔵寺駅！」でサッサと駅に向かった。

決断が早いというか諦めが早いというか、私はこうと決めたら後先のことは考えずに即行する。無駄だ、もったいない、もう少し粘ればいいのに…、と言われるかもしれないが、先は長いのだ。無理して頑張るはいけない。17:00を過ぎて宿に入らないことがジャーニーの鉄則だ。15kmくらいのカットは帰りにカバーすればよい、となる。

高蔵寺駅から電車に乗り15分で多治見駅に着いたが、今夜の宿、ホテル「古窯」は中心街にはなく探すのに時間がかかった。国道19号からちよいと入り込んだ所にあった。電車カットは正解だったようだ。

アパート風の2階建てのホテル「古窯」は、滞在型のビジネスだ。¥4600で寝室は8畳、セミダブルベッドとソファベッド、外流し式の風呂、広いキッチン、ゆったりとしたトイレが付いている。有料放送テレビも無料で、コインランドリーは5台もあった。居心地良過ぎ、こんなビジネスもあるんやなと感嘆した。

しかし、国道沿いのため居酒屋はない。あるのは、ファミレス、焼肉食べ放題屋、うどん屋だけだ。仕方なく1kmほど歩き、飲食街へ出た。

多治見は窯業で名高いが、その製品は家庭用というよりも業務用だとのことだ。街は意外にも小じんまりとしていた。

あちこち散策すること30分、やっと見つけたのは韓国風焼肉屋「末広」だ。中央線沿いにあり、控えめな佇まいだった。ジャーニー中は一度は焼肉屋に寄りたい。それが韓国風だったら尚更いい。願ったり叶ったりである。

いつも通り元気良く、「御免下さい、こんばんわ。一人ですけどいいですか」と店に入ると、「らっしゃい！こちらどうぞ」と女将さんが、10人は座れる大鉄板の一角へ案内してくれた。先客が6人座っているが、気にはならない間隔があった。

まず、生ビール大(10)とキムチ、チャンジャ、この店名物のチジミを注文した。チジミは辛さが何段階もあったが、とりあえず無難な中辛にする。直径30cmのが目の前で焼かれ、焼けたところを適度な大きさに切り分けてくれた。今晚のツマミはもう十分というほどのボリュームがあった。口に入れると、中辛なれどヒュー！とくるが、治まるとまた入れたくなる。これがいいんだな。今まで食したチジミの常識をはるかに超えていた。

ビールは2杯でストップしマッコリに移る。出たのは、「にっこりマッコリ」だった。やや高級だが味は良いやつだ。1.20のボトルを横にデーンと置いてくれた。

喉も腹も落ち着いて来たので同席者の観察へといく。若い、医師2人と女医、車のディーラーの社長さんとそのお客さん夫妻だろうか。どうやらゴルフ帰りの一席らしい。

ご夫妻のご主人の方が酔っぱらって喚き散らしている。「先生方、ワシは明後日内視鏡検

査なんやが、こんなに飲んでもだいじょうぶかな。」と尋ねた。3人の内の一人が、「まあ、気にしなくてもいいんじゃないですか」と答えた。

20～30分してその夫妻が帰ると、3人の医師は顔を見合わせて、「あれヤバイよね」と言った。私は思わず吹き出し、「あんなことを言ってもいいんですか」と言うと、「あの人、一度痛い目に会わなきゃ直らないんですよ。」と応えた。医は仁なり。

ここから話題はこちらへ向く。私が大分県人だと分かると、直に「関サバ」の話になった。

私は鰯はさほど好きではないが、鯖は好きで好きで2日に一度は食べている。豊後水道で獲れる鯖に誇りを持っており、これをネタにすれば、向うの人を1時間以上釘づけにする自信がある。

さらに、九州男児にはもう一つ切り札がある。芋焼酎だ。この辺りには黒霧しか置いていないから、本格的な芋焼酎には関心があるに違いない。

関サバと芋焼酎、それにジャーニーランの話が加わると耳を傾けない人はいない。九州生まれで良かったネ、大分生まれで良かったネ、と感じる一時だった。

若い3人の医師達は、勉強一筋の青春だったのだろう、自由奔放な私の生き方に目を丸くして聞き入っていた。

「流離う」ことは、当たるか外れるか博打みたいなものだ。私はギャンブルとはほとんど縁がないが、飲食店に関してはある程度の勘があるのかな。多治見の夜も、いい店、いい人たちに出会えて幸せだった。

さあ、明日からは木曾路入りだ。どんな出会い、人、道、峠、景色が待っているのか。考えただけでワクワクする。今夜は眠れそうもない。

< 長良川河口堰 >



